

[佳作]・[経済同友会賞]

学科間連携による相乗効果の検証

～伝統工芸「柳井縞」の地域ブランド化に向けて～

山口県立柳井商工高等学校

ビジネス情報科3年 関 永 佳奈実・中 岡 祥 乃
 ビジネス情報科2年 倉 増 紗 希・坂 野 日 菜
 新 田 実 桜・森 田 愛 菜
 建築・電子科2年 新 田 純 弥

山口県立厚狭高等学校（協力校）

総合家庭科3年 伊 東 滢 南・俵 絵里奈

1 はじめに

山口県立柳井商工高等学校(以後：柳井商工高校)は、平成18年に「柳井商業高校」と「柳井工業高校」が統合して誕生した学校である。柳井商工高校は「商業系学科」と「工業系学科」が併設されている新しい枠組みの特徴的な専門高校である。柳井商工高校は、平成26年度より地元の伝統工芸「柳井縞（やないじま）」をテーマに、商工高校の特色である「ものづくり」から「商品開発・流通」までを調査研究の視野に入れ、建築・電子科建築コース3年課題研究ものづくり・まちづくり班、情報研究部、インターアクト部、ものづくり部で「商工」を織り交ぜて組織を拡大し、まちづくりプロジェクトチーム（本年度32名）とし

て研究実践を行っている。これまでに地域の方々のご協力をいただきながら、大型機織機（はたおりき）の製作、イベントで機織体験ワークショップ、ファッションショーでのPR活動、地元小学校への出前授業等を行ってきた。この商工連携の取組について、外部評価では「高校生によるまちづくりの取組は地域活性化に繋がる」と評価をいただいている。このことから、商工連携の取組は相乗効果が期待でき、お互いの特徴を生かし地域活性化につながるということが明らかになった。専門高校の学科の垣根を越えた商工連携は、大きな効果が期待できる可能性が見えてきた。しかし、商工連携では機織機を製作して柳井縞を織ることはできるが、柳井縞の織物を十分に生かせるほどの

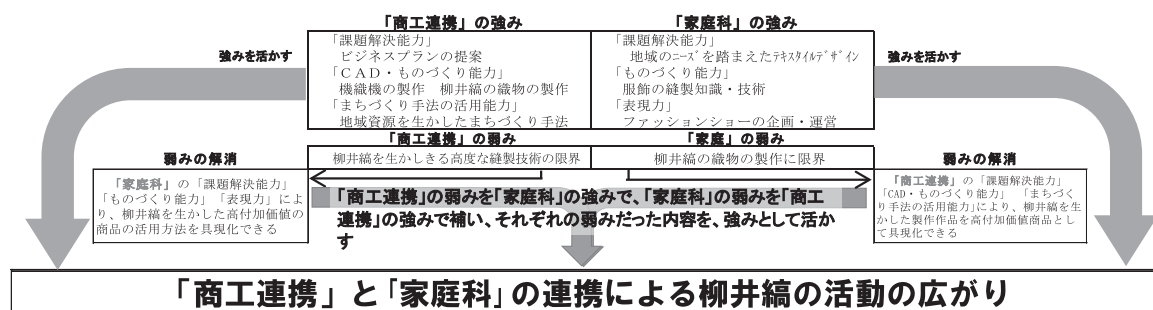


図1 「商工連携」と「家庭科」連携の分析図

縫製の知識・技術に欠けるという課題があった。

そこで家庭科との学科間連携を検討し、全国のファッションコンテストで数々の入賞を果たしている山口県立厚狭高校総合家庭科（以後：厚狭高校）に連携を依頼した。私たちは、家庭科、商業科、工業科が連携（以後：学科間連携）することでどのような効果生まれるのか検証し、地域資源である柳井縞の地域ブランド化に向けた研究に取り組んだ。

2 「商工連携」と「家庭科」の連携の可能性検証

これまで柳井縞の研究を実践している「商工連携」と「家庭科」が連携することの可能性は何かを知るため、自己分析を行った。SWOT分析の「強み」「弱み」の整理方法を利用して、「商工連携」と「家庭科」のそれぞれの「強み」・「弱み」をあげた。そのうえで「弱み」の部分に関して、お互いが解消できる点を探った（図1）。このことより連携する取組によって、研究に3つの生かし方を以下に示す。

- ・「商工連携」独自の強みを活かす
- ・「家庭科」独自の強みを活かす
- ・お互いの「弱み」を補いあい、「弱み」だった内容を「強み」として活かす

特に「お互いの「弱み」を補いあい、「弱み」だった内容を「強み」として活かす」ことについては、「商工連携」では、実施が困難と考えていた活動に取り組むことができ、活動の範囲が広がると分析した。よって、「商工連携」、「家庭科」においても「相乗効果により、柳井縞の活動が広がり地域活性化に貢献できる」のではないかと考えた。

3 伝統工芸「柳井縞」について

伝統工芸柳井縞の歴史は古く、江戸時代に岩国藩の御納戸として知られた商都柳井を中心に発達した木綿織物である。柳井縞の定義は、①木綿②手織り③縞模様である。柳井縞は岩国藩が織物の

検印制度を設け、品質を認められたことにより、江戸時代中頃には柳井木綿として瀬戸内海地域や大阪で盛んに販売された。しかし、明治時代後半には機械織りの誕生などにより衰退しはじめ、大正時代以降は幻の織物となってしまった。その後、平成5年に、柳井の伝統工芸柳井縞を復活させようという団体「柳井縞の会」により、新生柳井縞が製作されている。柳井縞の会は、完全手織りにこだわった柳井縞の生地から商品開発等を行っている。私たちは、柳井縞の会のご協力・ご指導をいただきながら研究を行っている。

4 学科間連携の実践活動

平成28年7月に柳井商工高校と厚狭高校の第1回目の合同会議を行い、これまでのお互いの研究活動の紹介と今後の取組について話し合い、以下の3つについて検討した。

- ・専門高校の学科間連携の可能性を探る
- ・学校で学んだ知識と技術を活かす
- ・伝統工芸柳井縞の地域ブランド化を目指す

そして検討した内容を踏まえ、山口市と京都市へ両校で先進地視察をした。山口市で「Re維新」レーベルなどを展開する合同会社匠山泊会長の岡部さんを訪ねた（図2）。匠山泊は、山口市にあるメイド・イン・ジャパンの世界戦略ブランドとして設立された純国産のジーンズ製造会社である。岡部さんからは、「布の国内自給率は4%を下回っている。大量生産をする輸入された商品と勝負することは難しい。手織りにこだわったストーリー性を持った高付加価値商品の開発することが大切である」というお話を伺った。次に、山口県立大学国際文化学部部長水谷教授を訪問した（図3）。山口県立大学と地域が連携し、地域資源を生かしたファッションショーの取組や山口縞の研究開発について伺った。「それぞれの専門性をコラボレーションした取組はおもしろいと思う」とご教授いただいた。また平成28年10月23日に山口県長門市で開催するアグリアート・フェスティ

バル2016に両校で合同の柳井縞ワークショップ出張のお誘いを受けた。



図2 匠山泊(山口市) 図3 山口県立大学

京都市では、吉田手織工房に伺い、西陣織の織機の知識と技術について学んだ(図4)。また全国で「SOU・SOU」ブランドを展開する株式会社若林の社長兼デザイナーの若林さんを訪ねた(図5)。平成12年に設立された「SOU・SOU」は、伝統工芸「伊勢もめん」による手ぬぐいなどの商品開発を行っているほか、地下足袋、帽子、かばんなど斬新な和の要素を含んだ商品を手掛ける新進の和装製造販売のデザイン会社である。若林さんからは、「とにかくコンセプトを変えずに、柳井縞の研究を続けることが大事である。柳井縞で何か代表作をつくり、それをPRに使ってほしい。高校生が手織りの柳井縞に挑戦するという、異色の組み合わせはメディアなどに取り上げられやすいので、その強みを十分生かしてほしい」というお話を伺った。さらに、今後の高校生と「SOU・SOU」のコラボレーションについても前向きに検討していただくこととなった。



図4 吉田手織工房(西陣織) 図5 SOU・SOU

これらの合同会議や先進地視察から柳井縞のブランド化を目指すため、異色の組み合わせによる新たなPR方法を考えていった。お互いの強みを生かした学科間連携で機織機の製作、テキスタイルデザイン、柳井縞の織物の製作、縫製までオール高校生で一貫して生産し、世界に一つしかないドレスを製作することになった(図6)。

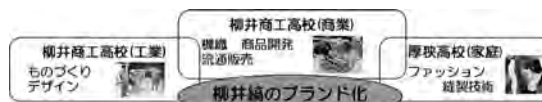


図6 学科間連携の各学科の役割

そこで、両校がドレス生地のテキスタイルデザインの検討を行い、縞柄を生かすために試行錯誤を重ね2案(図7)を採用した。また、柳井商工高校が考案した柳井縞のテキスタイルデザインの871(や・な・い)縞の織物を使用することになった(図8)。



図7 テキスタイルデザインの開発(2案)



図8 テキスタイルデザイン871縞

3種類のテキスタイルデザインを元に、柳井商工高校が製作した大型機織機(図9)で柳井縞を織り始めた。機織機に0.5mmの経糸800本を1本1本手作業で通した。間違えると織物にエラーが発生するため慎重に行った。機織機や糸のトラブルは日常茶飯事であったが、毎日協力しながら解決し、織物を完成した(図10)。



図9 柳井商工高校が製作した大型機織機



図10 3種類のテキスタイルデザインの織物製作

平成28年8月に厚狭高校と柳井商工高校の第2回目の合同会議を行った(図11)。やまぐち総合研究所の中村さんにも参加していただいた。糸から柳井縞のドレスが完成するまでのプロモーションについてご助言いただいた。平成28年度より厚狭高校生の思いを込めた「提灯」、「rinne」というテーマが決定しており、そのドレス「提灯」のデザイン画(図12)を見せていただいた。柳井商工生が製作した柳井縞の織物を厚狭高校へ引き渡し、ドレスの製作が始まった。



図11 柳井縞の織物の引き渡し



図12 デザイン画「提灯」

厚狭高校はドレスデザインを何度も練り直してドレスの製作を進めていった。そして、商工連携と家庭科のコラボレーションのドレス「提灯」と「rinne」を完成させた(図13)。

平成28年10月23日のアグリ・アートフェスティバル2016では、柳井商工高校、厚狭高校、柳井縞の会の柳井縞に関する3団体が合同で大きなブースを構えることになった(図14)。効果的に柳井縞をPRするために各団体の役割を決めた。柳井商工高校のブースは、柳井縞の普及と伝統継承を目的に、柳井商工高校が製作した小型機織機による機織体験を実施(図15)し、厚狭高校ブースでは、柳井商工高校(柳井縞反物製作)×厚狭高校(デザイン・縫製)のコラボレーションによるドレス「提灯」、「rinne」を展示した。柳井縞の会は、手作りの柳井縞のベスト、帽子等販売を行った。私たちは、お客様に柳井縞の取組について紹介し、賑わいを見せた(図16)。



図13 ドレス「提灯」と「rinne」の完成



図14 柳井縞の3団体が合同でブース出展



図15 小型機織機体験ブース



図16 ドレスの展示



図18 ファッションショー

5 活動の評価

学科間連携の研究実践は、他学科の連携だけに留まらず、地域の方々、企業、大学など多くの人と協働することとなった。これらの組織が相乗効果を生み、大きな取組となった。外部評価では、企業経営者から「高校生が手織りの柳井縞に挑戦するという、異色の組み合わせはメディアなどに取り上げられやすいので、その強みを十分生かしていけばよい」と評価された。また高校生の取組として新聞等多数のマスメディアにも取り上げられる活動となり、ブランドの宣伝効果も高く、そして信用は高まっている(図17)。



図17 学科間連携の取組について紹介
(読売新聞 平成28年8月25日付 一部加工)

また学科間連携でコラボレーションしたドレスは学習成果発表会のファッションショーで作品を披露した。そして平成28年度全国高校生クリエイティブコンテストへ出品され、佳作を受賞した(図18)。

私たちは平成28年12月に第3回合同会議を開き、研究活動を振り返るとともに内部評価を行った。お互いの学校が遠く(距離110km)、調整が難しいという地理的な事情がとて大変だった。一方で「3学科の連携で、それぞれ違う視点から物事を捉えることができ、とても良かった。」「家庭科では服の製作やデザインをすることは当たり前前の事だけど、商業科や工業科からすると普通ではないということに驚いた。」「お互い当たり前のことが、実はすごいことをやっていると感じた」という意見があがり、お互いの専門性について改めて認識できた。

6 おわりに

この研究から1つの物事でも、専門性の違いから全く違った角度から物事を捉えることができるため、多種多様な発想が出てくるのがわかった。そして学校で学んでいる自らの専門性について改めて再認識できた。

柳井縞という共通テーマにより、学科間連携すれば、お互いの弱みを補い相乗効果で期待でき、大きなプロジェクトに発展することがわかった。地域や企業の方々に協力していただきながら、学科間連携をし、「オール高校生」で取り組んでいることが、柳井縞に対して高付加価値となり、マスメディア等に取り上げられPRに繋がっていった。私たちの目標である柳井縞の地域ブランド化は、まだ入り口に過ぎないが、これからも学科間連携を続け、継続的に実践していきたいと思う。